御嶽山信仰の歩み

川越市南山田御嶽講
講元　鹿倉利雄

「ザザーッ」

激しくお湯のこぼれ出る音。大きなお相撲さんの様な御嶽山の御師（おし）さんがお風呂からあがり、祖父や祖母と談笑しています。私はこっそり風呂場をのぞきました。驚きです。お風呂の水が半分に減っています。部屋に戻っておそるおそる御師さんの前に出て頭をさげると、御師さんはニコニコされて会釈を返していただきました。その時、私は小学校入学の前年で「神様が家に泊まる」と、大変誇らしい気分になったのを覚えて居ります。私達の村は古くから御嶽山崇敬信仰の念厚く、御嶽講がつくられて私の家は代々、御師さんの講まわりの時の宿舎に指定されていた様で、御嶽神社宮司の馬場喜一様が私の最初の出会いでございますが、毎年秋の穫り入れがすむと御師さんがお出でになるのを楽しみにして居りました。

武蔵御嶽講代表者懇親会　駒鳥山荘　平成14年12月1日

そして御嶽様は五穀豊饒の作神様だから屋敷内の御嶽様の祠（ほこら）に毎日お祈りをする様にと祖母、母から云われて居りました。

その後御師さんも慶一様の時代となるわけですが、慶一御師のまだ学生の頃、昭和二〇年第二次大戦終結間際、農家の人手不足の手助けと云う事で麦刈り田植えの準備等農作業のご奉仕をいただいた事もありまして、一段と御嶽神社のご加護を身近にいただいた感がしたことも鮮明に覚えて居ります。

そして昭和三〇年頃までは毎年御嶽講の代参参詣が私達の村でも行われて居りましたが、いつの間にか途絶えてしまいました。今では講の中で幾つかのグループに分かれて参詣をしている様です。

平成の時代にはいり御師さんは喜彦様となりましたが、この人が又、駒鳥山荘を経営していらっしゃる関係もあってか、大変如才無い方で未だ続いている講まわりの時も大変な人気の様です。

只、御師さんの講まわりもここ数年は、お山から直接車で下山出来ると云う事で日帰りとなってしまった事が寂しい気がいたします。

然しながら私達の御嶽講は平成二年に武蔵御嶽講代表者懇親会なるものを立ち上げ、以来十三年間、毎年十二月初旬に駒鳥山荘に各講の代表者が二十数名集まって、御嶽様のご隆盛、私達へのご加護・ご利益を祈念し親交を深めて居ります。十三年間と云いますと若干の世代交代もありましたがこの会が末永く続きます様願って居ります。

ここに、武蔵御嶽神社の益々のご隆盛・ご繁栄と関係神職皆様のご清祥を祈念いたしまして稿を閉じさせていただきます。

平成十七年 酉年式年大祭記念事業

当社では、酉年式年大祭を記念して左記事業を計画し、順次工事を行ってまいります。この事業の趣旨にご賛同いただける方は、随時ご寄進を受け付けております。

講中関係の皆様は主幹宮司に、崇敬者の方は社頭にてお願いいたしております。

一、大鳥居建替
一、避雷針新設（平成十三年竣工）
一、幣拝殿屋根銅板葺替
一、宝物殿外部塗装（平成十四年竣工）
一、随身門屋根銅板葺替
一、放水銃新設
一、奥社解体修理及び覆舎新築工事

第三十回武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

選者　金子千侍

特選

一席　冬麗や神代欅の光る瘤　八王子市　夏目満子
二席　雲中に育ち御嶽のあめんぼう　桐生市　椎名彰
三席　廃校の日溜り借りて大根干す　八王子市　関まさを
四席　宿の灯を消し邯鄲に夜を返す　練馬区　丹野義子
五席　夏座敷御岳山より風もらう　千葉市　柳沢道子

秀逸（出句順）

霊山の春日を放つ大鳥居　青梅市　関塚文子
一枚の風春山にしてしまふ　横瀬町　鈴木厚美
しばらくは桜の上のお月様　練馬区　手塚昇
神杉の色の変りや花粉飛ぶ　あきる野市　大野絢子
夏の山小指の先に雲がゆく　鶴ヶ島市　中沢有希子
青梅路は御岳背負うて山笑ふ　青梅市　原島康典
榧の實を掌に香を聞きし女坂　相模原市　宮木律穂
神木の虚にムササビ春の月　日の出町　島崎百合子
稲妻の遠ざかり夜の深みけり　武蔵野市　木内佳都子
七代瀧凍てて巌と成りにけり　入間市　滝沢スェ子

佳作（出句順）

杉山にとりかこまるる午祭　青梅市　木口真一
暗闇も邯鄲の音に染められて　青梅市　津川通泰
見るうちに山湧き起こる春の雨　江戸川区　大釜正明
神殿の神の真下や蟻地獄　日高市　落合清子
祈願太鼓こだます山の笑ひけり　飯能市　森泉双輪
衛星とむささび飛んで夏がゆく　相模原市　山下東男
神の杉月出て冬の影つくる　青梅市　田中郷路
真夏日にナナフシ遊ぶ孫の手に　杉並区　前川陽子
破魔矢背にあずけて下る男坂　入間市　篠崎桂香
人波をかき分け泳ぐ破魔矢の帆　さいたま市　山縣唯理

応募総数　九八七句

選者吟

欅大樹冬陽一枝にぶら下げる

奉納俳句選評

特選一席

（冬麗や神代欅の光る瘤）

うららかな暖かい冬の日。数千年の樹齢を持つ御嶽山の老欅。その御掌には、神代からの幾多の歴史が綴り込められた巨きな木瘤が乗っており、一段と輝きを増しております。『瘤光る』では一景のみ。『光る瘤』で老欅の哲学が詠まれました。黒鋼のような重厚な秀句です。

特選二席

（雲中に育ち御嶽のあめんぼう）

御嶽神社の池か、水溜りに元気よく泳ぐあめんぼうを見掛けた作者は、へえー、こんな高い山であめんぼうが育つのかねえ、きっと御嶽山の神通力なのだらう。あめんぼうの生態系を『雲中に育つ』と詠んだ作者の諧謔。絶妙な表現です。

特選三席

（廃校の日溜り借りて大根干す）

冬の山間は日照時間が非常に短かく、生活している人々にとって、太陽は本当に尊い顔です。それにしても一番日当りの良い場所に造られている校舎、今は廃校になっていますが、ここを拝借して大根を干しているのです。短い冬日に発光している真白い大根が嬉しそうです。社会史、生活史をも背景に持った素晴らしい写生句です。

特選四席

（宿の灯を消し邯鄲に夜を返す）

邯鄲の闇大合唱は御嶽神社初秋の風物詩です。御師の庭、宿坊の庭などで聞く邯鄲の優艶な声は山の闇濃いほどに趣きを深めます。灯を消して思う存分に鳴くようにと、作品中の『夜を返す』、つまり深い夜の闇にしてあげたのでした。

特選五席

（夏座敷御岳山より風もらう）

一見平易単調な作品のように思えます。併し、本句を読まれた多くの人が、きっと夏座敷に入って来た御岳山の涼しい風に「気持ちがいいだろうなあー」と感ずることでせう。作者の感動が人々の感性を共鳴させたのでした。感動つまり『真の心』の表現という俳句の本髄を突いた秀句です。

第三十一回 奉納俳句募集要項

一、作品は未発表に限る
一、受付けは指定用紙にて投句箱へとする
（郵送等直接の受付は致しません）
一、締切りは平成十六年一月十五日
一、発表は平成十六年三月中旬